



マンガの影響

デパートの本屋で 熱中した「まんが道」

僕は都会育ちのひ弱な子供だった。小学校低学年のころ、僕の生活の中心は家から歩いて3分のところにあったデパートの7階の本屋だった。クーラーが効いて快適だったこともあり、夏休みは毎日のように通った。開店から閉店まで貪るようにマンガを立ち読みし、疲れると床に座りこんでまた読んだ。デパートははたきを振って客を追回すことはしないが、それとなく監視されているような気配を感じ、ときどき移動した。

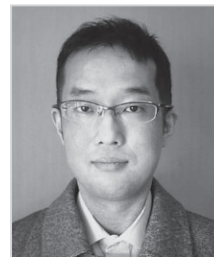
当時熱中して読んだのは、藤子不二雄だった。中でもお気に入りだったのは「まんが道」だ。作者自身をモデルにし、マンガ家を夢見て日々努力して成長していく物語であり、私にとって初めての教養小説だった。読み終わると、張り切ってマンガ家になることを決意し、マンガの描き方入門のような本やペンやインクを買いそろえた。意気込んで、画用紙を綴り、コマ割りを書いて、数ページは描くのだが、いつも途中で飽きてしまい、残念ながら完成させたことは一度もない。



藤子不二雄から 法律マンガへ

ところで最近、子供向けに裁判傍聴のイベントを

会員 関口 英紀 (60 期)



行った際、質疑応答があり、児童から、どんなきっかけで弁護士を目指したのか訊かれ、答えに窮したことがあった。あらためて考えてみると、20代後半で司法試験の勉強を始めるまで、法律や弁護士にはほとんど関心がなかったような気がする。



思い返せば、藤子不二雄を読破した後、マンガ売り場にあるものをあらかた読んでしまい、読むものがなくなってしまった。仕方がないので、大人

向けの書籍売り場を何気なく歩いていると、マンガでわかる法律の抜け穴といった類の本が目に入った。民事事件のストーリーがマンガで描かれ、各回の終わりに法律のコラムが載っている。小学校低学年の子供にとって、フリントかソングバイショウとか理解できたのだろうか。ただマンガだからというのでシリーズすべてを読み切ったのだと思う。だから長年の間、読んだことすら忘れていた。

気がつけば 弁護士に

裁判傍聴の児童から質問されたときには思いだせなかったが、法律の道に進んだのは、子供の頃にマンガを読みまくったことがきっかけだったのかも知れない。自分がマンガの影響を受けやすいことに、改めて気がついた。